

校長の高野です。今回のテーマは、伏木けんか山祭りです。この祭りについては、本校の野口安嗣先生が高岡ケーブルテレビで解説者をつとめておられ、大変にお詳しいです。そこで、特別講師として野口先生に歴史と見どころを分かりやすく解説していただきます。

伏木けんか山祭りの歴史と今（前編）

「伏木曳山まつり」は伏木神社の春季大祭として、毎年5月に行われます。昼は7基の花山車と、神輿にお供する子供たちの母衣武者行列が町内を巡行します。夜には提灯山車へと姿を変え、山車と山車を激しくぶつけ合う「かっちゃ」が行われます。このため地元では、この祭りのことを「けんか山」と呼んでいます。

曳山が造られたのは、文政3年（1820）に始まると思われまます。江戸時代の伏木湊は、加賀藩の支配下におかれ藩米の回送や北海道まで至る北日本沿岸諸港との北前船による交易によって、海運・商業活動がひとときわ盛んな時期を迎えていました。曳山建造の担い手になったのが、富山県最初の小学校を創立した藤井能三に代表される「能登屋」や、芥川賞作家の堀田善衛の生家「鶴屋」などの廻船問屋です。当初は、海岸鎮護や海上安全の祈願から発せられ、町の開発と共に明治期にかけて順次造られていきました。

現在伏木の曳山は、文政3年（1820）に創設された中町〔ひょうたん山車〕に始まり、同7年（1824）の上町〔ささ山車〕、天保12年（1841）の本町〔がんがら山車〕、寶路町〔せんまい山車〕へと続きます。さらに万延元年（1860）に石坂町〔字山車〕、元治元年（1864）に十七軒町〔ほら貝山車〕、明治に入り明治25年（1892）に湊町〔ちょうちょう山車〕の7基が造られていきました。ただし、十七軒町の山車は明治の火災で焼失しており、平成27年（2015）年に伏木の町の発展を願い復元され、伏木コミュニティセンターに常設展示されています。

祭り当日、各町の曳山は伏木神社でお祓いを受けたあと本町広場に移動し、出発式に臨みます。その後、今年の当番町を先頭に一基ずつ「イヤサー、イヤサー」のかけ声とともに町内を奉曳します。ちなみに来年（2024）の出発順は、①本町が当番町で以下②上町、③中町、④湊町、⑤石坂町、⑥寶路町、⑦十七軒町の予定です。

奉曳の順路は、1年毎に昼の花山車と夜の提灯山車で巡行コースを入れ替えます。夜の奉曳の最中には、2度本町広場と伏木支所前で「余興」が行われます。「余興」とは、山車と山車をぶつけ合うことをいいます。みどころについては、後編で紹介します。夜の奉曳終了後、各町の曳山は伏木神社へ御幣を返して山倉にもどり、御神楽の音色とともに伏木の熱い一日が終わりをつげます。

（文責：野口安嗣）

